

## 21世紀の Holy Union 関西学院と聖和との合併交渉当時の一文書から考える

Holy Union in the 21<sup>st</sup> Century

田淵 結\*

### Abstract

Precisely speaking, this work is not an academic article or something near to it, but an introduction of report on “Seiwa College”, from a view of Kwansei Gakuin’s staff. It was originally written in 2006, when the idea of the merger of two schools became a propose with great reality. The author, that is myself, was the Dean of Chaplains of Kwansei Gakuin, and also the University Chaplain of the Kwansei Gakuin University, and with these positions participated to the discussion for the merger. With that situation, I thought it was necessary to do some research on Seiwa from the Christian principles and obliged to write this report. And it was completed and waiting for the publishing, which did not occur. The talk between two parties halted on many levels, and the merger itself postponed one year. After that difficult time, the talk was resumed and rather quickly headed for the conclusion and agreement. During that last phase of the discussion, concrete issues were given priorities, and these historical or philosophical considerations were rather set aside, and my paper was forgotten even by myself. After ten years since then, I am now coming to the age of retirement from Kwansei Gakuin, I happened to find this my old writings and though it may be worth to publish as as “historical document” to show how a staff of Kwansei Gakuin saw Seiwa and took the issue with regard to Christian principles of two schools.

The main body of the paper is consisted of seven chapters, and the first half gave some historical analysis to the Protestant Christian background of Seiwa, one is from the Methodistic (Lambuth legacy), and the other from the Congregational side. The Japanese expression “Seiwa” (聖和) means “Holy”-“Union” which signified the merger of these denominational tradition respectively, in 1941. After Seiwa’s inauguration, how these two denominational character implemented to the new institution. After 70 years, Seiwa was facing new “Holy Union” in 21st Century, with Kwansei Gakuin. In the last few chapters of the paper, the author cast some questions to be discussed during the course of dialogue with two parties, that is, how much this unification will affect each schools’ own identities. As I mentioned above, this paper is originally aimed to give general information about Seiwa to the Kwansei Gakuin community members. And I hope years later, this paper could give some insight how a chaplain of Kwansei saw our partner and the merger itself.

### はじめに

本稿の主要部分は、筆者がかつて記した文書の再録である。といってもそれがどこかに公刊され発表されたことはないので、厳密に言えば「再録」にはあたらないだろう。もちろんその発表を控えたのは、何よりも内容の不十分さへの筆者としての自覚があり、さらにはその発表のタイミングの適不適が

懸念されたからである。しかし、今回、あえて本論を紹介しようとするに至ったことについて、および当時のこの文書執筆の背景などについて若干の紹介をしながら序言としたい。

本論をまとめたのは、2006年ごろのこと、その背景として学校法人関西学院と学校法人聖和大学との合併協議が行われていた。当時筆者は、大学宗教主事として大学執行部においてその議論に加わり、ま

\* Musubi TABUCHI 関西学院大学教育学部教授

た畑道也院長のもと宗教総主事として関西学院法人サイドでの協議にも与っていた。関西学院にとって、いかに歴史的背景を共有しうる聖和大学との合併といえども、別個学校法人との初めての合併であり、様々なレベルでの話し合いが精力的に続けられ、あるいは時には停滞・中断という場面もあった。そのような議論の中で、筆者としては、この合併のキリスト教主義学校としての意義についての検討をゆだねられる立場にあり、そこで改めて、感覚的には非常に近いと思われていた聖和大学についての学びの必要性を強く感じていた。そのとき故竹中正夫先生の著された『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』（創元社、2000年）を見つけ、それを読みつつ、当時進められていた合併交渉の前提となる資料をまとめておきたいという思いから、この本論をまとめることになった。当然この文書は何らかの会議体や発行物で公表されるべきであったのだが、その時点で両校の交渉が「踊り場」と呼ばれるように全く停滞してしまい、関西学院として、ある意味「一面的な聖和論」の公表を差し控えるべきであろうという筆者自身の思いが強くなっていった。実はこの本論の校正を、当時の合併準備室のスタッフにお願いしたのは、あまりにも業務が少なく、ならばこの校正をお願いしたことも懐かしく思い出される。

しかし、ある時期から関西学院理事会が合併交渉を積極的に進める決断をし、さらに大学として教育学部開設という具体的なビジョンを打ち出す中で、一方では法人合併として、他方で新設学部開設準備として事態が展開すると、もちろん合併の理念などについての検討もなされたが、それは「当然の前提」されてしまい、むしろ具体的合併、新設学部開設協議に話が進むと、改めてこのような文章を踏まえての理念的議論は「割愛」されてしまった。筆者自身も、学部宗教主事、大学宗教主事、宗教総主事の日常業務に加えて、当時の文学部から新設の教育学部への移籍をめぐる協議、合併準備委員、新設学部開設準備委員としての会合などに追われるなかで、この本論の存在についての記憶も薄れてしまい、その後放置されてきた、というのが実情である。

しかし、本年度3月末での関西学院退職が迫ってくる中で、改めてこの文書を再発見し、関西学院の一員としてその当時そのままの思いを再録することにあくまでの「筆者なりの歴史性」を感じるものであり、当時関西学院サイドの一員の聖和理解の一端

を紹介することに意味を感じさせられている。目下関西学院大学教育学部としては、学部開設10周年の歩みを回顧する冊子の編集が進められており、また昨年は従来の聖和史の集大成となるべき『Thy Will Be Done 聖和の128年』（聖和史刊行会 関西学院 2015年）も公刊されている。ただしそのいずれもが「法人合併」を全体のテーマとするものではなく、それぞれの直接の関心に従った部分においての詳細な記述を持つものとして重要な意味を持っている。本稿の本論部分も決して法人合併の全容を語るものではなく、あくまでも当時の関西学院におけるキリスト教主義教育の責任者として「聖和をどう受け止めていたか」を、その立場から語っているにすぎない。筆者は、その翌年学校法人関西学院と学校法人千里国際学園との法人合併交渉にも直接に携わる経験を与えられることになったが、学校法人同士の合併を動かすものとしては、もちろん相互の財政的、施設状況における同意、教職員、学生、生徒、保護者、同窓などの状況と理解、さらに監督官庁との折衝や近隣諸学校での議論、その他その全体にかかわる調査分析も必要とされるのが当然であるが、やはり両者の教育理念、教育理解、教育目的の一致・合意・共有が前提とされなければならない。おそらく本稿は、将来的に行われるであろう。そのような「法人合併史」あるいは「学院史」研究のための「ひとつの史料」を紹介するものでしかないこともご了解いただきたい。なお、以下の本論は、誤記、誤字・脱字を除いてほぼ執筆当時そのままの文章を記載したものであり、また本来の文書の性格上、多くの注記などは付されていないが、今回の「再録」にあたって、2018年時点での必要な部分にはそれを加えている（【注】部分）ことをご理解いただきたい。

（本論）

## 聖和 — Holy Union — のキリスト教的背景と関西学院合併をめぐる見解

今合併をめぐる色々と話題になっている「聖和大学」について関西学院のひとりひとり、われわれ「関学人」はどれだけ知っているのだろうか？ 聖和大学と関西学院とのつながりはただ西宮市内の「お隣さん」の大学という以上に、歴史的に古く、理念的にも深い。

## 一、南メソジスト監督教会による聖和の源流

【注 本稿においては Methodist 教会の標記を「メソジスト」で統一する。】

そもそも「聖和」という名前は英語で“Holy Union”、<聖なる和合>ということで、1941（昭和16）年に神戸女子神学校、ランバス女学院という二つのキリスト教女子学園が「和合」し、「聖和女学院」として成立した。第二次大戦後1950（昭和25）年に聖和女子短期大学（宗教科、保育科）となり、やがて1964（昭和39）年4年制の聖和女子大学（教育学部＝キリスト教教育学科、幼児教育学科）となり、さらに1981（昭和56）年に共学化して現在の聖和大学となっている。

この歴史のなかに「ランバス女学院」という名前を見つけて、関学人としては「ナルホド」と思えるだろうが、現在の上ヶ原と神戸三田両キャンパスの正門前に経つ「ランバス記念礼拝堂」でも明らかのように、関西学院の創立者であるアメリカ南メソジスト監督教会宣教師ランバスとのつながりがそこに自然に思い起こされる。ただしランバス女学院の方は、関西学院の創立者ウォルター・ラッセル・ランバスの母メアリー・イザベラ・ランバスを記念して命名されたものである。メアリーと夫ジェームズ・ウィリアムスは最初、ともにアメリカ南メソジスト監督教会の宣教師として中国に派遣され、32年間にわたって上海を拠点に宣教活動を展開した後、1886（明治19）年に神戸に転任した。日本での南メソジスト監督教会の活動は、西日本各地に教会を建てそれらを通じて福音宣教活動を行うと同時に、各地に学校を設けて教育活動をも精力的に推進した。その最初となる学校は、まずランバス家の住居となった神戸居留地47番館に開かれた読書館を起源とするパルモア学院であり、現在関西学院接続校となっている啓明学院はこのパルモア学院に由来する。1887（明治21）年に神戸山二番（現在の阪急三宮駅北側、ちなみにこの場所は1983年まで啓明学院の校地であった）にジェームズとメアリーの居館が移転した際に開かれたのが、ランバス女学院の前身である神戸婦人伝道学校（のちにランバス記念伝道女学校）であった。最初は若い女性たちに聖書、英語、讃美歌を通じての音楽、編み物などが教えられたというが、やがて伝道学校として聖書学、伝道者試補養成

手引き、教会問答などが教授されるようになり、メソジスト教会における伝道活動従事者の教育課程と、それに併置して英語教育課程なども持つ組織となった。

その時期、広島においてはジェームズ、ウォルターらの働きによって現在の広島流川教会となる教会が設立されたのに続き、1886（明治19）年に広島英和女学校（現在の広島女学院）が開設され、やがてそこに同じく南メソジスト監督教会から赴任した宣教師ゲーンズが着任し校長となっている。興味深いのは、その学校に当時広島でひとつしかなかった公立幼稚園が経営困難となり広島英和女学院がそれを引き受けたことである。その結果、この幼稚園をはじめとして各地のキリスト教幼稚園の教諭養成が緊急の課題となってきたので、1895（明治28）年に広島英和女学校に付属保母師範科が設けられ、以後幼児教育指導者養成機関【注 関西学院大学教育学部的は表現をすれば「幼児教育指導者」は「幼児保育者」と表現すべきであるが、当時の筆者の理解による表現をそのまま用いる】としての役割を果たすことになった（さらに1893（明治26）年には小学校も設置されている）。このような、南メソジスト監督教会の教育事業の一環として、1889（明治22）年には、わが関西学院が創立されることになる。

ところで、当時のこれらの学校の経営主体は、何度もその名前が出てくる「南メソジスト監督教会」であり、したがって本国教会の財政面を含めての支援がある反面、その意向によってそれぞれの学校のあり方が大きく決定されるが、当時の本国教会本部において西日本の中心である大阪に女性のクリスチャンワーカ―養成のための学校についての新構想が提案された。その背後に明治・大正期においては女性牧師という存在が認められていない時代にあつて、広島英和女学校付属保母師範科とランバス記念伝道女学校とは共に教会における女性指導者、教育者の養成において共通する教育内容を持っていたことから、本国教会が経営上の観点からそれらの二校を統合するというプランが生まれていたようである。やがて1919（大正8）年神戸パルモア学院で開かれた南メソジストミッション会議において、広島女学院付属保母師範科とランバス記念伝道女学校合同の決議がなされ、南メソジスト監督教会による大阪を拠点とする女子キリスト教伝道者および幼児教育者養成がランバス女学院として展開されることに

なった。このランバス女学院は1921（大正10）年2月、大阪上本町6丁目付近にその設置が大阪府より認可されている。

このような歴史を見る限りでは、関西学院と聖和さらに広島女学院はランバスファミリーがその基礎を据えた、南メソジスト監督教会による文字通りの姉妹校、兄弟校である（関西学院はその一番下の弟ということになるが）現在パルモア学院をも含めてランバスリーグを形成してゆるやかなその連携を図ることも自然であり、今回の聖和大学と関西学院の合併は、大正期における広島女学院附属保母師範科とランバス記念伝道女学校の合併のように、歴史的な背景からしても十分に理解されるものであるとも言える。

## 二、神戸女子神学校～アメリカンボードによる設立

しかし今、関西学院と聖和大学との合併計画があるときこそ、聖和のメソジスト的理解だけで「聖和」という学校の名称の持つ意味、その歴史的な背景を一面的にしか解釈してはならない点が指摘されなくてはならない。つまり Holy Union とは決してランバス関係学校によるメソジスト教派内の Union ではなく、プロテスタント教派間でのより大きな合同を意味していた。つまり「神戸女子神学校との和合」である。神戸女子神学校の創立はランバス女子伝道学校の前身となる神戸婦人伝道学校の創立よりもさらに8年前、1880（明治13）年、当時の呼称でいう「組合教会」によって行われる。「組合」とは英語の Congregational の訳語で「会衆派」とも訳されるが、日本においては禁教令撤廃の直前から伝道を開始しており、アメリカの同教会からの宣教師派遣母体である米国外国伝道委員会（American Board of Commissioners for Foreign Mission、以下「アメリカンボード」と記す）からの最初期の宣教師の一人が新島襄であった。新島は京都に同志社を設立するが、組合教会の関西地区におけるもうひとつの伝道拠点が開港地神戸であり、明治初期には D. C. グリーンによって神戸ユニオン教会、摂津第一公会（現日本キリスト教団神戸教会）、摂津第二公会（現同大阪教会）、摂津第三公会（現同三田教会）などが相次いで設けられている。また教育機関として同志社の創立の年1875（明治8）年には神戸に旧三田藩主九鬼一族の後援を受けて「女学校」（現在の

神戸女学院）が設立された。この女学校の設立者となった宣教師ダッドレーおよびタルカットによって1880（明治13）年に女子伝道者養成のために設けられたのが神戸女子神学校である。ただし日本組合教会における女性牧師の誕生が、1934（昭和9）年の長谷川初音が最初であったように、明治・大正期においては女性が正式な教会の牧師となることは認められておらず（ちなみに御茶ノ水師範学校卒業後神戸女学院に国語科教師として在任中に関西学院神学部で神学を学んでいる）、この女子神学校はもっぱら教会における信徒奉仕者養成機関であり、その卒業生の多くは組合教会牧師と結婚をしている。

神戸女子神学校は、その後長く神戸で活動を続けたが、それまで組合教会の経営主体であったアメリカンボードから日本組合教会が独立するという動きのなかで、神戸女子神学校の経営も日本における組合教会に移管され、実質的には独立した学校経営を求められた。1923（大正12）年ごろから次第に経営の困難さが生じた結果（1930年代に神戸女子神学校で教鞭をとった宣教師ヒューステッドは「このような仕事は…どのような報酬もいただかないでできればよいと思います。ここで生活し働くという特権だけで十分なのです」と、当時の同校の状況下での思いを手紙に託している（イーデス・ヒューステッド（茂純子訳）『日本人への贈り物』、聖和大学2000年10頁）。そこで思い切った経営方針の転換が図られ、校地を神戸から西宮市岡田山（現在の神戸女学院隣接地に移転することを決議し、同時に社会事業学科を併設することになった。同じく神戸から移転した神戸女学院よりも一年早い1932年7月には岡田山に神戸女子神学校の新校舎（現在の関西学院聖和キャンパス4号館）が完成し、移転が進められた（「岡田山において神戸女子神学校のために購入した土地は、総坪数五二八〇坪五号九勺（約17.5平方キロメートル）、その価格は一万二七七〇円一〇銭であった。」（竹中正夫、『ゆくてはるかに～神戸女子神学校物』、101頁）。ただこのとき同じく日本組合教会をバックとする神戸女学院と神戸女子神学校との合併が行われなかったことについては、興味深い問題としてさらに考究されるべきであるが、女子神学校が間接的ながら伝道者養成という独自の目的をもっていたこと、また当時のこれらの学校がアメリカンボードからの援助によらずほぼ独立した経営を求められるなかで、各校が独自の経営責任を負うと



いう選択が自然であったのではないかと思われる。社会事業学科については大正デモクラシー以後の日本社会の動きのなかで、キリスト教からの社会問題への取り組みが強調される状況が生まれることを背景として設けられた。そこに竹内愛二が招かれたが、彼はやがて同志社を経て関西学院に移り、大学文学部社会事業学科から社会学部福祉専攻課程（後の社会福祉学科、さらに関西学院大学が構想中の人間福祉学部に至る）関西学院大学における社会福祉学の基礎をすえることとなった存在である。

### 三、聖和の成立

昭和期になって日本社会が徐々に戦時色を強めていくなかで、神戸女子神学校のみならずランバス女学院もまた経営上の困難さを抱えていた。設置母体である南メソジスト監督教会ミッションボードからの財政支援も削減され、一時は閉鎖の議論まで交わされるなかで、ランバス女学院としては関西学院との合併も考えられたが、当時男子校である関西学院との合併はかなわなかった。さらに他教派女子神学教育機関との合同の可能性もさまざまに模索された。1933（昭和8）年ごろから神戸女子神学校（組合教会）、芦屋聖使徒女子学院（聖公会）、バプテスト女子神学校（バプテスト派）、及びランバス女学院（メソジスト派）などの間でその協議が進められてゆくが、そのように多様な教派間での女子神学校合同の動きを押し進めたものは、単に財政上の問題だけではなく、日中戦争から太平洋戦争への動きへと戦時局面が濃厚となってゆくなかで、軍部の強い指導により日本のプロテスタント教会もそれまでの各派別個の独立した活動を制限し、教派大合同（統合）が求められ、1940（昭和16）年「日本基督教団」としての成立に向かっていった。そのような動きのなかに神戸女子神学校とランバス女学院との合併合意が成立し、ランバス女学院は1940（昭和15）年末に上本町の土地・校舎を形式的に愛国婦人会大阪支部に寄贈し、同会からの五十万円の「感謝金」を得て西宮市河原町に土地・家屋を求めてそれを寄宿舎および幼稚園として活用することとし、学校としては神戸女子神学校に統合移転した。1941（昭和16）年3月13日、ランバス女学院は最後の卒業生を送り出し、続く3月18日に神戸女子神学校も最後の卒業式を挙行、事実上それらが両校の閉校式となった。こうして両校は合併を実現し、同年4月15日に聖和女

子学院として最初の入学式を行い、同26日には兵庫県知事から合併認可をうけている。

ところでこうして成立した「聖和」の歩みが、その後の戦時下において決して順調に推移したわけではなく、キリスト教学校としての苦難がさらに続くことになる。神学教育機関としての神学校であるが、合併年度早々から戦時下における三年間の修学年限を満了することは困難とされそれを短縮し、卒業時期を繰り上げるという処置を余儀なくされることが二年にわたって続いた。さらに当時の文部省の指導のもと、日本基督教団は神学校統合を行い、東京に日本基督教神学専門学校と日本女子神学校を1943（昭和18）年に開校した。関西学院神学部もやがてそこに統合という形で閉鎖され、聖和女子学院神学部も同年3月閉部式を行い、ここに神戸女子神学校およびランバス婦人伝道学校以来の神学教育の歴史が中断されることになった。聖和女子学院は神学部廃止後の1943（昭和18）年4月に改めて保育部と社会事業部の二部制での再出発を試みたが、この社会事業部も振るわず一年後に廃止されている。

### 四、戦後の聖和の歩み

こうした戦時下の状況への対応のなかで神学部および社会事業部を廃止した結果、聖和は幼児教育の分野についてのみの教育機関として存在しつつ終戦を迎えることになり、戦後しばらくはその体制が継続されることになった。もちろん終戦と同時に神学教育再開の可能性は十分に考えられ、期待もされたが、戦後教育全体の民主化が推進される中で、関西学院大学および同志社大学の各神学部においても女子学生の入学を認める方向にあり、聖和における神学教育再開の実現は果たされなかった。しかしこのことは「聖和」そのもののあり方についての大きな議論を含むものでもあった。つまり戦時中から戦後以後の聖和が幼児教育指導者養成課程のみであるとすれば、それは外形的には広島英和女学校付属保姆師範科～ランバス女学院の伝統（のみ）を継承するものであり、実質的には神学教育課程ならびに社会事業課程を擁した神戸女子神学校の教育内容が失われたままになってしまふことを意味したからである。その現実が組合教会とメソジスト教会の合同としての「聖和」の存続の意味を問い直すものとなり、1946（昭和21）年に組合教会の母体となったアメリカンボードからは「聖和が神学部を無くして、保育

部のみを持つ事は、合同条件に対して違法である」という申し入れがなされた(『聖和八十年史』、238頁)。これは合同の解消あるいは再検討を求めるものであったが、その後聖和関係者とアメリカンボードとの交渉の結果、「吾々は聖和の合同を認め、保育部のみでもってこれをバックアップしたい。過去はたとえ違法的な行為であったとしても、万やむを得ぬ適当の処置として最善であったと信じる」(前掲書、239頁)、という結論をボードから与えられ、戦後「聖和」としての幼児教育養成機関としての存続が理解された。

1950(昭和25)年、聖和女子学院は大学への昇格を果たし聖和女子短期大学となったが、そこに二年制の保育科と三年制の宗教教育科を設置している。それはようやくにして、神戸女子神学校およびランバス女学院の伝統の再開であり、アメリカンボードが指摘した「違法」性の解消への努力の現れでもあった。この宗教教育科はその後、日本基督教団における教会教育担当者「キリスト教教育主事」養成機関として位置づけられ、今日に至っている。

## 五、聖和におけるキリスト教

さて今回提案されている関西学院と聖和大学との合併をこのような歴史を踏まえて考えると聖和を単純にメソジスト学校(姉妹校)として位置づけることはできない。確かに幼児教育指導者養成については、広島英和女学校を通じてのメソジスト的系譜が考えられ、それが戦後さらには今日まで一貫した流れであるかのように見える【注 現在の関西学院幼稚園(旧聖和幼稚園)はまさにこのメソジスト的系譜の中にある】。組合教会の系譜を引く幼児教育者養成機関としては、現在の頌栄保育学院となる頌栄保母伝習所を1889(明治22)年に開設しており(日本基督教団神戸教会編、『近代日本と神戸教会』、創元社、1992年、50頁以下)、独自の歩みを形成してきている。また神学教育においてはもちろん神戸女子神学校を源流とするものと、同時にランバス記念伝道女学校からのメソジスト的伝道者養成の流れも含まれているだろう。さらに神学部廃止以後の聖和にとって、また日本基督教団という教派合同の教会そのものの状況のなかで、組合教会およびメソジスト教会の教派的独自性も混在しつつあり、どこが組合教會的、メソジスト教會的であるのかという区分は、現実的にはほとんど意味を持たなくなってい

る。聖和のバックボーンとなるキリスト教精神は、まさに日本基督教団による合同教會的なキリスト教理解によって今日まで形成されており、幼児教育指導者養成課程においてもキリスト教教育主事養成においても、かつての教派性において語られるものではない。

## 六、関西学院と聖和

さらに関西学院サイドからこの聖和との合併について考えるとき、理念的に検討されておかねばならない課題がいくつか浮かんでくる。それらの根本には合併によって関西学院はその建学の理念の変更が求められるかどうかという問いが横たわっている。関西学院は確かにランバスファミリーによる創立ではあるが、その後の歴史のなかでカナダメソジスト教会の経営参加を経て学院存続の危機を乗り越えてきている。つまり南メソジスト教会の敬虔主義にカナダメソジスト教会の持つ社会的現実主義が加わって【注 田淵「創立者ランバスとスクールモットー提唱者ベーツ」『関西学院の礎を築いた人・出来事から学ぶ』関西学院宗教活動委員会 2015年】今日の関西学院の独自性が形成されたと言える。カナダメソジスト教会宣教師、第4代院長ベーツが提唱した“Mastery for Service”がまさに関西学院の教育理念を示すスクールモットーとされることは、単純にランバスの抱いた理念がそのまま今日の関西学院のあり方に受け継がれているものではない。とすると、確かに聖和大学がメソジストスクールとしての性格を保持し続けていたとしても、それがランバス女学院という南メソジスト監督教会からのものとすれば、関西学院の持つメソディズム理解との微妙な相違があることにも注意すべきである。

さらに上述したように、聖和が「聖和」としての歩みを続ける中でのキリスト教精神が合同教會的な神学理解も内包してきたことも十分に理解されるべきである。確かに関西学院も第二次大戦以後、もはや純粋なメソジスト的なキリスト教理解という枠組みを超えて日本基督教関係学校となり、大学神学部も日本基督教団認可神学校となっている。しかし日本のキリスト教界の現実においては、組合教會的系譜(同志社系)とメソジスト系(関西学院)、および旧日本基督教會的(東京神学大学)という牧師養成期間(神学部)におけるそれぞれの独自性が明確に存在しており、各個教会への牧師招聘に際しても

そのような系譜、神学的立場や伝統を反映している。例えば関西学院における神学教師さらには宗教主事には同志社大学神学部出身者は一人も採用されておらず【注 まさにこの状況は執筆当時のものであり、2018年には双方に同志社大学出身者が在職している】、同志社におけるキリスト教関係教員にはロバート深田宣教師がアメリカ合同メソジスト教会から着任されていた以外（現在は定年退職）、メソジスト関係、関西学院神学部出身者の採用はない。つまり、合同教会としての日本基督教団のコンテクストのなかでも、以前組合教会とメソジスト教会との「棲み分け」が存在していることも事実であり、その意味では関西学院はメソジスト的、「関西学院的」キリスト教理解の中にあるといえる。聖和大学には、戦後キリスト教学科教員として関西学院大学神学部出身の松永晋一、西垣二一、奥田和弘などが在職し松永、西垣、さらに関西学院院長をつとめた宮田満雄などが聖和女子大学学長を歴任するなかで関西学院（神学部）との関係も強く見られると同時に、現在のキリスト教関係専任教員においては関西学院大学神学部の出身者はなく、二名は同志社大学神学部の出身であり、その意味では組合教会的ないし日本基督教団的であろう。

とすれば、聖和大学にとっての今回の関西学院との合併は、これまで保持してきたキリスト教理解を関西学院的なものに接近させるということになるであろうが、関西学院として組合教会的伝統を含む聖和的なキリスト教への接近の可能性も予想される。どうやら議論が「神学論争」化してきたので、最後にもう少し具体的な事例をひとつ考えてみたい。

今回の合併が内包するさらに単純な問いは、この合併によって成立する「あたらしい学園」の創立年をどこに位置づけるかということである。もし神戸伝道女学校創立の1880（明治13）年を採用するとすれば、関西学院にとっては南メソジスト監督教会による日本伝道開始前に自らの存在の起点を置くことであり、関西学院にとっても組合教会の伝統を大きく関与させて意味づけることにより、従来の学院史を大幅に書き換えることが求められよう。これに対して関学人にとっても当然の1889（明治22）年を今後も堅持するということは、聖和が有してきた神戸女子神学校の歴史をこの合併が解消させるものとなりかねない。聖和大学と関西学院との合併は、それぞれに学校の歴史の枠組みを根本的に問い直す重大

な問題を含んでいることは決して見過ごすべきではない。

## 七、キリスト教主義学校の合併

今回の合併は、日本におけるプロテスタント主義にもとづくキリスト教主義学校のあり方についての非常に興味深い問題を含んでいるし、それが単にキリスト教主義にもとづく一般教育機関ではなく、神学教育機関を擁する学園同士の合併という点において、その問題はさらに深みと複雑さを示している。

神戸女子神学校がランバス女学院と合併して聖和となり、しかも神学部が廃止された際に、永年神戸女子神学校の神学教師をつとめ、聖和発足後も神学部教務主任であった長坂鑑次郎は「昨今の心境」と題して次のような一文を記している。

「ついに解消した。聖和女子学院のなかに残りし、神戸女子神学校の面影までも解消した。これで何もかも終わりを告げた。…（中略）…（昭和）一六年はランバスと合同した。しかし合同は一種の死であった。学校も個性を持つ存在だ。特徴が強ければ強いほど合同は困難だ。二つを兼ね合わせて一つにするのは殺すことになる。一方が他方を併呑することなら簡単だ。しかし合同は当時の大勢であった。やむを得なかった。ためにずいぶん苦勞した。なんとかして生かせるだけは生くべく戦った。両方の特徴を尊重してと心を砕いた。そして幾分は実現したと思う。しかし合同生活二年というものは、悪夢の見続けとでも言うべきものであった…（以下略）」（竹中、前掲書、425頁）。

この長坂の慨嘆は、戦時下におけるキリスト教学校関係者の苦悩を示すものあると同時に、そのような社会的状況の中で教派的アイデンティティの保持に腐心しつつもそれを十全に果たしえないひとりの組合教会キリスト者の率直な感想であっただろう。

## 終わりに

キリスト教学校同士の合併の持つ難しさ、それは単なる経営上の困難さの解決への方策として扱われてしまってはならない。まさにそれぞれの学校の「建学の理念」への問い直しを含むものであるがゆえに、理念的にもっとも深く、総合にとっての厳しい問いかけを含んでいる。今回の合併の話合いが、どこまで両校のキリスト教主義学校としての伝統を踏まえたものになるのか、その意味で関西学院

もまた、みずからの建学の理念の見直し、ある意味での再構築をも含んだ合併を行うのか、あるいは“Mastery for Service”が聖和との合併以後に形作られる学園のスクールモットーとして機能するのか、もっと具体的な言い方をすれば、創立記念日はいつになるのか、『空の翼』をともどもに声を合わせて合唱できるのか、そのようないくつもの問いの前に関学人も聖和の人々も共に立たされていることを、今認識しなければならない。(本論終わり)

## むすびに

おそらくここまで書き続けると、私にゆるされる原稿規定枚数を超えてしまっていると思われるが、この文章を再読しつつ、法人合併以後の10年間の経験のなかで、いくつかの問題は杞憂に過ぎなかったこともあり、思いがけない仕方で解決されたこともあり、そして問題提起そのものが忘れ去られてしまったこともあるように思われる。とても教育学研究という学術誌、紀要として求められる内容には程遠いが、ひとつの「歴史的史料」として記録に残していただけることを願っている。

### 主な参考文献

- 竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』創元社、2000年  
聖和史刊行会『Thy Will Be Done 聖和の128年』関西学院 2015年  
関西学院百年史編纂事業委員会『関西学院百年史』(全四巻) 関西学院1995-1998年  
キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会『キリスト教学校教育同盟百年史』(本編、資料編、年表) 教文館 2010-2012年